第2章 杵築市の維持及び向上すべき歴史的風致

本市は、伊予灘、別府湾を望む海岸線となだらかな山々が囲む豊かな自然環境を有している。高低差のある地形をいかした杵築城の城下町では、武家屋敷、町家、社寺等が往時を物語り、城下町一帯の風情を伝えると同時に、天神祭りや祇園祭り、屋敷祭り等の多彩な祭事が受け継がれている。城下は藩政期を礎とする水利をいかし、人々が営みを続けている。海岸部では船からの道しるべとして古墳や鳥居、灯台が守られてきた。また、市内には、祭事や溜池の連携等貴重な水利をいかした営み、集落の結びつきにより維持されるとうや行事も息づいている。

このような歴史的な建造物と、歴史や伝統を反映した活動が一体となって歴史的風致が形成されている。これをふまえ、本市の維持向上すべき歴史的風致として、以下の4つを挙げる。

1. 城下の営みにみる歴史的風致
   1-1 城下町の祭事にみる歴史的風致
   1-2 城下の水利にみる歴史的風致
2. 寄港の道しるべにみる歴史的風致
3. 水利への知恵と信仰にみる歴史的風致
4 とうや行事にみる歴史的風致

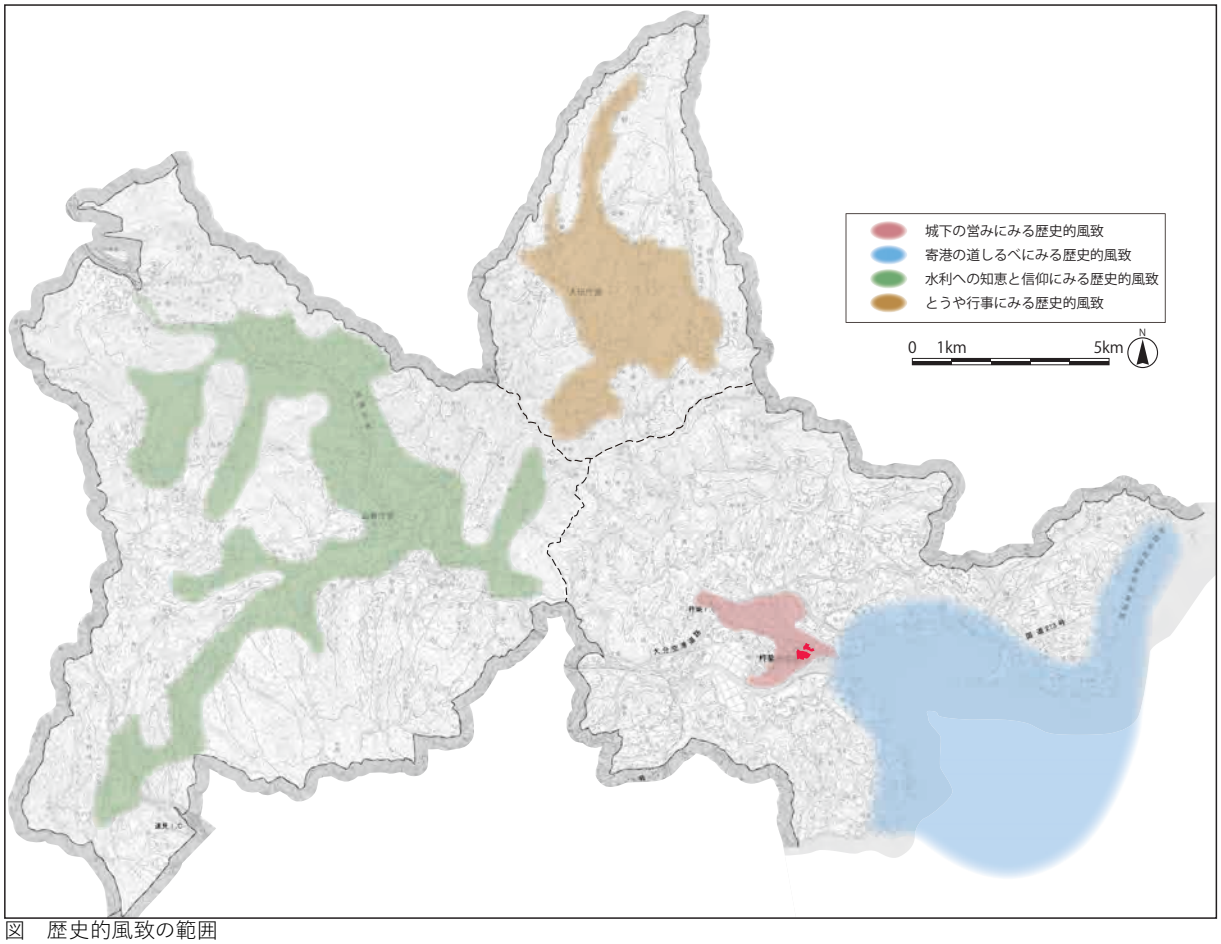


図 歴史的風致の範囲

1. 城下の営みにみる歴史的風致

1-1.城下町の祭事にみる歴史的風致

（１）はじめに

杵築城の城下町は、正保２年（1645）、杵築藩主となった松平英親（まつだいらひでちか）が整備に着手した。北台と南台の台地の上には武家屋敷が築かれ、間の谷地には商人が暮らす町家が配された。そして、その高低差をいくつもの坂がつないでいる。

廃藩置県後は、武家町に住むことをステータスとした商人や地元有力者たちが、武家町に移り住むようになり、地割を生かした和風住宅も見られるようになった。

昭和以降、歴史的町並み保存の機運が高まっていったこともあり、現在、杵築城の城下町は、重要伝統的建造物群保存地区（以下、「伝建地区」とする）に選定されている北台と南台の武家町をはじめ、町人町、寺町が一体となって伝統的な佇（たたず）まいを維持している。

加えて、伝統的な城下町を舞台として、年に一度の屋敷祭りや、天神祭り、祇園祭りなど、近世からの営みが、地域の人々によって大切に受け継がれている。

杵築城からみた城下町

（2）城下町の祭事にみる歴史的風致の構成

1）城下町の祭事に関わる町並みと建造物

1)-1　城下町の祭事に関わる町並み

ア）城下町の形成

『杵築市北台南台伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2017）より、現在の町並みの骨格となっている城郭と城下町の構成と形成過程についてまとめると、以下のようになる。

まず、杵築城が台山に作られたのは応永元年（1394）と考えられている。この台山が、現在の岬の先端の郭であるか、北台であるかは明確ではない。

元和元年（1615）、一国一城令が出されると、杵築城は破却され、これに伴い、詰の丸、本丸、二之丸、三之丸などにあった天守や櫓、門なども破却された。その後も城のあった地は「城山」「杵築城跡」と称されて、城郭機能が設置されることはなかった。17世紀後半の絵図を見ても一国一城令後、城山に施設らしきものは描かれてなく、城郭機能は「御殿」（居城）が果たしていたと考えられている。

城下町は、周囲を矢来で囲み、6か所の口屋には番所が置かれていた。陸路の玄関口は西端にあった馬場尾口であり、海路の玄関口は城の鼻口（御船手口、川口）であった。ここには船手屋敷や千石蔵、六軒町があり、問屋の蔵などが置かれた。町とは御殿へ続く大手広小路で分れていた。

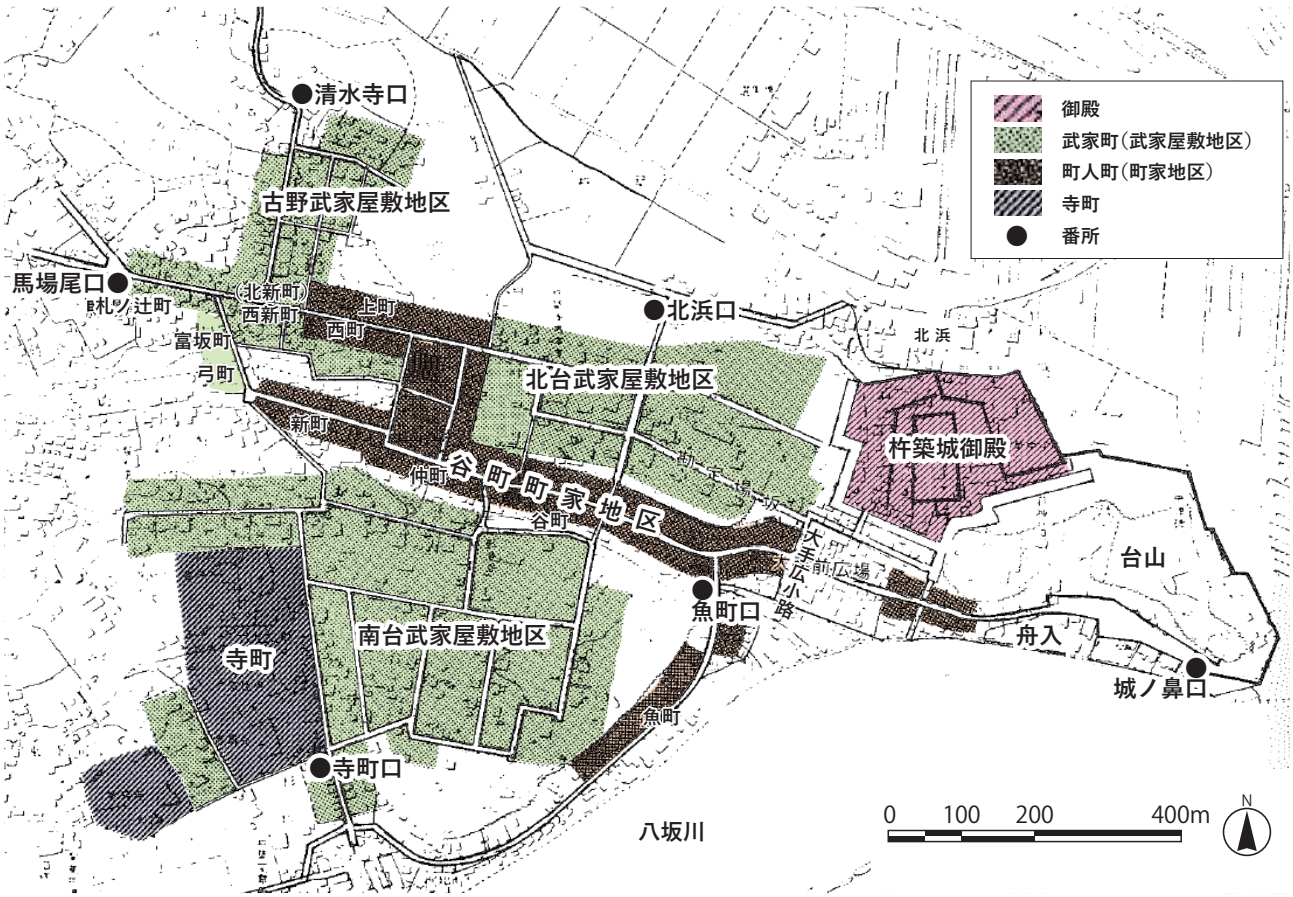


図　江戸時代の杵築城下町の町割り（『杵築の町づくり―歴史文化環境整備計画のための調査報告書』を基に加工して作成）

北台及び南台には上中級の武家屋敷が置かれ、特に城郭に近い北台の勘定場の坂通り、南台の塩屋の坂に続く通りは「家老丁」※1と呼ばれ、重臣の住居として大規模な武家屋敷が配された。北台の西端にある古野には足軽層の住居が置かれた。

南台の西側には寺町が置かれた。

町人町は谷川筋を中心として、谷町、仲町（古くは中町）、新町、北台の西端の西町、南台崖下の魚町があった。

こうした近世の城下町としての主要な町は17世紀末に成立したと考えられている。

18世紀前半には新町から西町への坂道に富坂（町）が成立し、18世紀後半は札ノ辻（町）、19世紀前半には払い下げられた武家地に西新町と北新町が成立している。

このような幕末期の城下町の状態を示す史料として、天保12年（1841）から嘉永２年（1849）に制作されたと推定される『いろは版杵築城下絵図』（能見家所蔵）があり、城郭部分や神社、南端にあった舟入などが細密に描かれているほか、北台、南台の上中級武家屋敷だけでなく、西新町、北新町、古野、富坂下の弓町等にあった武家屋敷も記載されている。

明治以降は、多少の分筆等はあったものの、大きな地割の変化はなく、今なお往時を偲ばせる良好な町並みが維持されている。

現在の城山の様子

いろは版杵築城下絵図（能見家所蔵）（一部加工）

※1　町役所日記の記述に武家地では家老丁、本丁等の「丁」の文字が使用されており、一方、町人地では魚町、新町等の「町」の文字を使用している。

イ）武家町

●杵築市北台南台伝統的建造物群保存地区

北台と南台の武家町は、江戸時代、家老を含む上級及び中級武士の屋敷が配されていた。寛政12年（1800）ころに描かれた『杵築城図（金子絵図）』には、当時の武家居住者の姓名が記されており、それぞれの役職や知行高を確認することができる。

現在の地割は江戸時代前半期（延宝から元禄ころ）の屋敷地割を約6割踏襲（とうしゅう）していることが、伝統的建造物群保存対策調査により明らかとなった。加えて、土塀や生垣、門で囲まれた江戸から昭和にかけての主屋や付属屋も多数見られる。

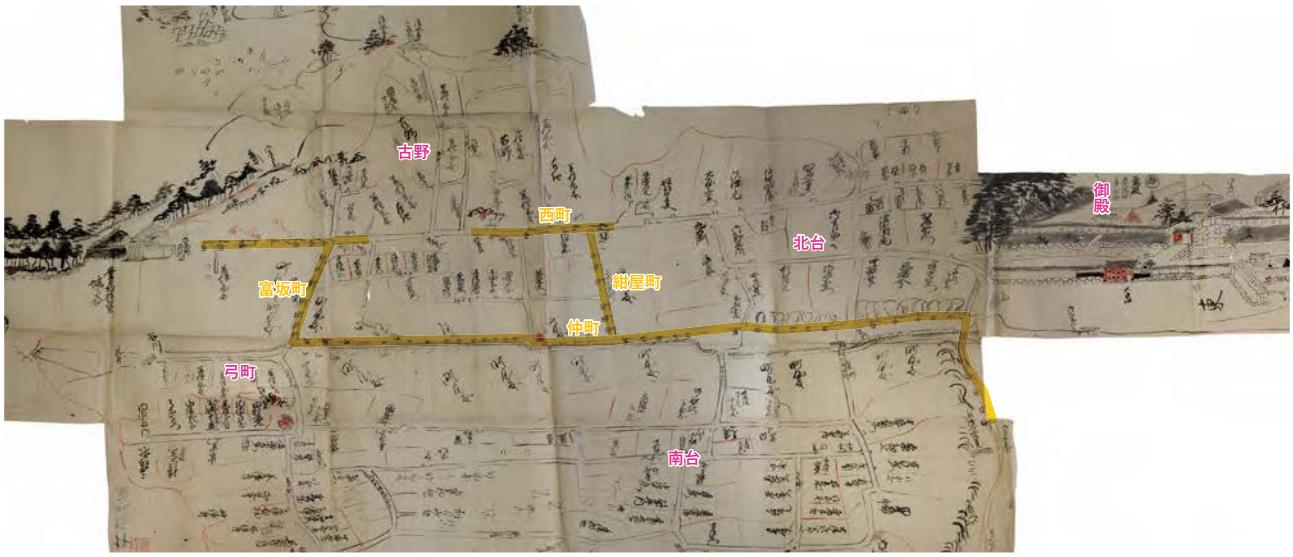
このことから、伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているとして、平成29年（2017）に、約16.1haが伝建地区に選定された。

伝建地区内には、屋敷神を祀る家も多数あり、屋敷祭りの風習が受け継がれている。

また、天神祭りでは地区の周囲で御神幸（ごしんこう）が行われるため、伝建地区内は賑やかな音で包まれる。

北台南台伝統的建造物群保存地区

北台南台伝統的建造物群保存地区



杵築城図（金子絵図）

ウ）町人町

町人町は、谷川筋にある谷町、仲町、新町、北台西端に位置する西町、紺屋（こんや）町、上町、西新町、北新町、南台崖下に位置する魚町、谷町筋の東に位置する下町、六軒町がある。

松平氏の入部以前の町家は、城山と北台の間の比較的小規模な範囲にまとめられていたが、城山の北麓での城郭建設に伴う城下町の整備により、谷川筋へ町家が一部移転したことを契機として谷川筋を西上する形で拡張発展したと考えられる。

町人町の初見は、『杵築城下町町役所文書』（以下、『町役所日記』という）において、宝永６年（1709）に記載がある、西町、紺屋町、新町、仲町、谷町、魚町、下町の７町である。その後、次第に拡張発展し、文化12年（1815）の絵図以降、幕末に至るまで町人町の広がりがないことから、現在に続く町人町はこのころに完成したと考えられる。

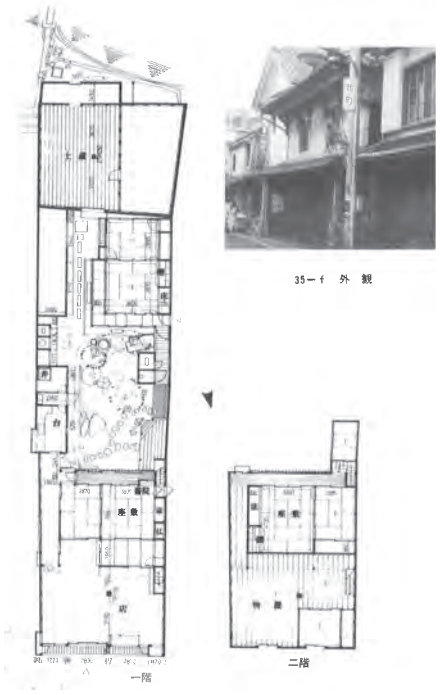
昭和56年（1981）に谷川筋を通る街路拡幅事業の実施が決定し、街路の幅員が16mに拡幅されたが、このとき、曳家（ひきや）されたとまや店舗兼主屋（登録有形文化財）や綾部みそ屋（市指定有形文化財）など、往時を伝える町家が現在も残っている。また、街路拡幅事業の影響を受けなかった谷川筋以外の町人町にも歴史的な町家が多数残る。

さらに、谷川筋や西町、上町、西新町などでは「杵築市城下町地区地区計画における建築物等の制限及びまちづくりに関する条例」に従って、景観誘導を図ってきており、一体として調和のとれた町並みが形成されている。

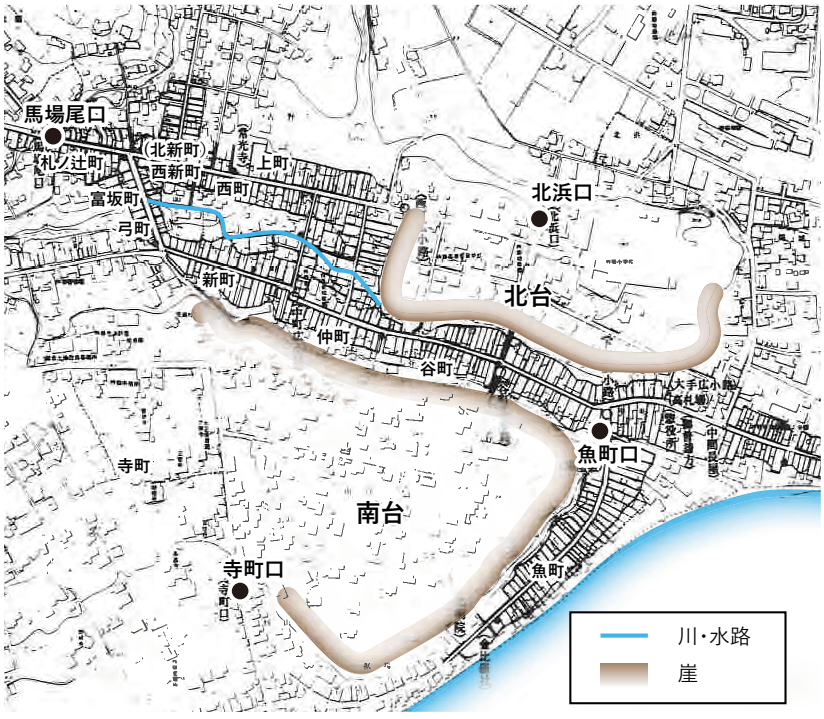
下図（町家の平面構成）のように町人町の町家は道路に対して間口が狭く奥行の長い短冊型に配されているが、背後はほとんどが崖地、川又は海となるので、奥行寸法はこれに左右されている。

毎年夏になると、多彩な練り物や神輿が御神幸として繰り出し、人々の歓声に満ちた活気あふれる天神祭りの舞台となる。

谷川筋



町家の平面構成（出典：昭和56年調査報告書）



町人町（『杵築の町づくり－歴史文化環境整備計画のための調査報告書』一部加工）

エ）寺町

寺町は南台の西端に整備されている。

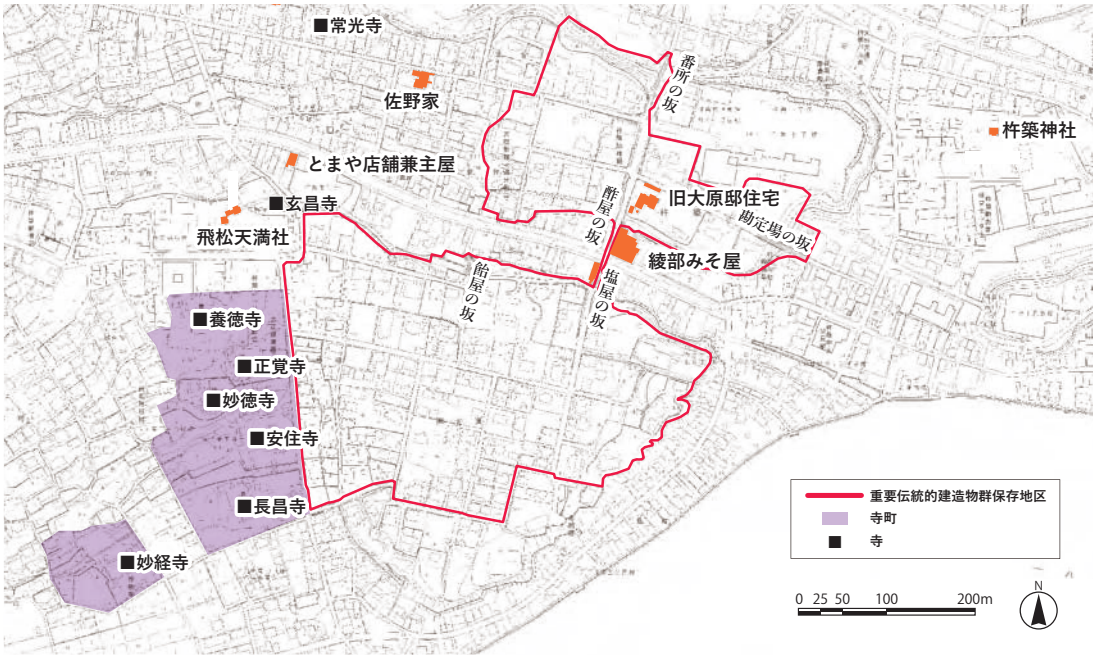
幕府が杵築藩領の職業とその人数や寺数などの領内事情を調べるために派遣した役人である巡検使の延享3年（1746）の報告覚によれば、杵築には、藩内135ヶ寺のうち城下には11寺あったことがわかる。11寺のうち、松平氏が入部する正保２年（1645）以前からあったといわれている寺は、安住寺、妙徳寺、正覚寺、常光寺、本立寺（廃寺）、妙経寺（前身は常顕寺）の6寺だった。なかでも、当初からの寺地を継承しているのは常光寺のみで、残りは松平氏によって城下町の南西に集められ、寺町が形成された。

安住寺

正覚寺

妙経寺

養徳寺



寺町の位置

オ）坂

杵築城下町は台地と谷間から成るので、いたるところに坂がある。

約15～16mと最も高低差の大きい坂が勘定場の坂（下表1）と酢屋（すや）の坂（下表3）、塩屋の坂（下表4）で、距離も長い。これらの坂を登りきったところは道幅が広くなっている。勘定場の坂は大手の広場に面したため、蹴上寸法が大きく立派に造られたと考えられる。

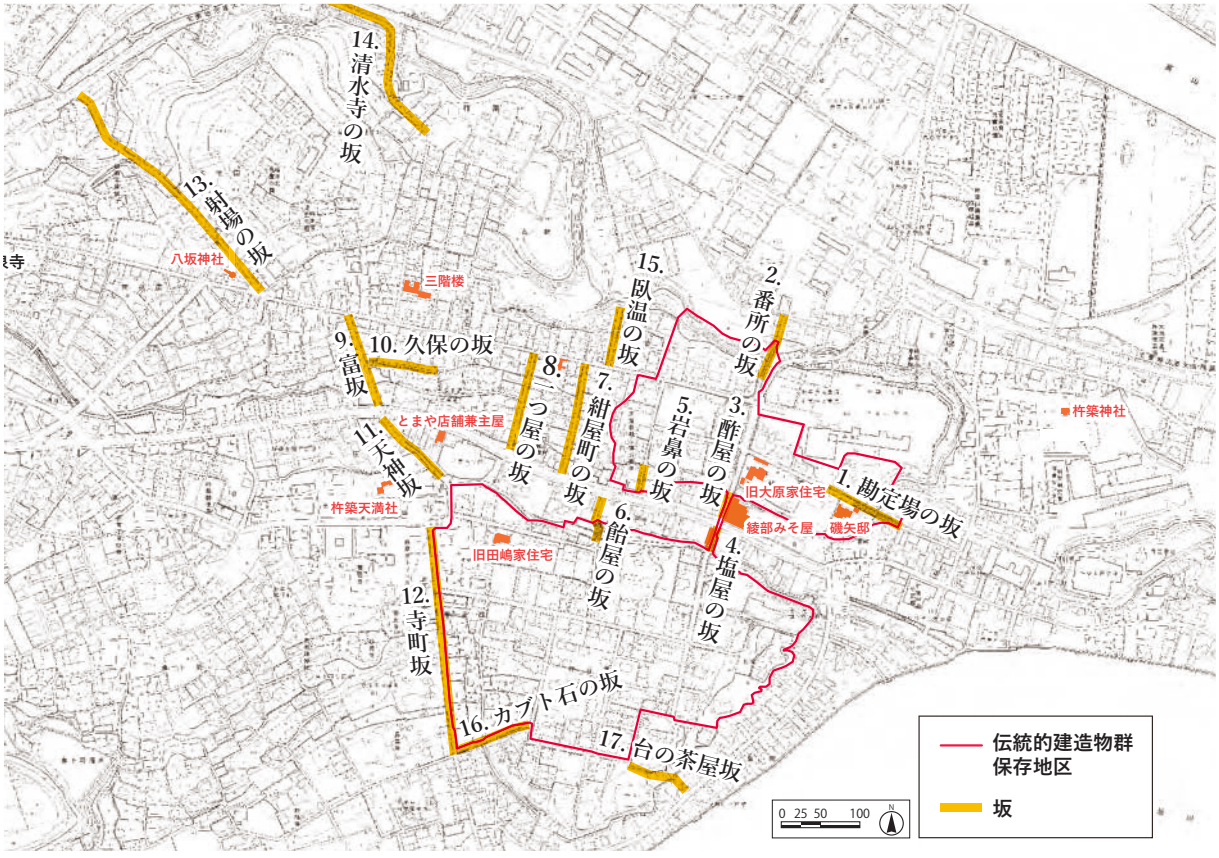
同様の長さで、比較的傾斜が緩く、直線状、高差13mほどの紺屋町の坂（下表7）、一つ屋の坂（下表8）、富坂（下表9）は現在スロープであるが、天保絵図より石段であったとみられる。急傾斜で曲がりながら登る岩鼻（いわはな）の坂（下表5）、飴屋（あめや）の坂（下表6）は現在も石段である。このように南北両台と谷町筋の間のほか、馬場尾口から東に直進する高差8mの道や寺町筋も北から南に向かう道も緩やかな坂となっている。

表　城下町の坂の概要

番号	名称	記録	内容	写真
1	勘定場の坂	明治絵図 町役所日記	大手門と北台を結ぶ坂。坂下にあった勘定場（高札）に由来する。勘定場は正徳元年(1711)に焼失した。昭和56年(1981)発行の『伝統的建造物群保存対策調査報告書』では最も見応えのある石段として記述されている。石段の幅は4.09mで53段、長さは65mあり、約24度の勾配がある。一段の蹴上は15㎝、踏面1.2mで、踏面は前面にわずかな傾斜を取る。これは駕籠による登降を考慮したものと考えられる。	
2	番所の坂	町役所日記	北浜と北台を結ぶ坂。坂の頂上に北浜口番所があったことに由来する。御殿の裏門に通じており、宝永3年(1706)3月、杵築藩主初代松平英親の葬儀の際、この番所の坂を登り、酢屋の坂、塩屋の坂を通り、南台本丁を経て菩提寺養徳寺に入った。町役所日記の嘉永2年(1849)の項には「一、北浜番所外坂並坂下廻り角石橋、御番所前切石に仕候。尤も土留羽口迄。一、小沢孫史郎脇坂（番所の坂）仕替え仕り候。」という記述がる。石段の登り口の幅が4.1mに対し、最上段では3.4mと逆に狭くなっており、城下町の入り口であったためと推測される。一段の蹴上14㎝、踏面85㎝で、石段の築き方は勘定場に似ている。	
3	酢屋の坂	町役所日記	谷町と北台を結ぶ坂。坂下にあった塩屋が天明6年（1786）に酢の永代株を請けたことに由来する。谷町からの登り口では幅が3.3mであるが、中程より上は扇形に拡がり、最上段では8.05mと最下段の倍以上の幅になっている。一段の蹴上は3㎝、踏面1.33mで斜路に近い石段であり、勘定場の坂とは異なった手法が取られている。これは騎馬による登降を考慮したものと考えられる。	
4	塩屋の坂	金子絵図	谷町と南台を結ぶ坂。坂下にあった豪商塩屋に由来する。この坂は藩主及び近親者の菩提寺参詣や葬送の道として使用された。坂の幅の取り方は酢屋の坂と同様で、登り切った処は道幅が拡げられている。昭和40年（1965）ころの写真より登口から資料館手前まで石段だったとうかがえるが、昭和42年（1967）に石段は撤去され、コンクリート舗装となった。平成18年（2006）に坂の登口から中腹までを石段に戻し、上半分を石畳として現在に至る。	
5	岩鼻の坂	町役所日記	仲町と北台を結ぶ坂。谷町北側西詰に切り立った崖があり、その岩鼻を避けるように曲がっている。町役所日記の記録では、弘化2年（1845）2月に「岩鼻の北側の坂道普請」を町人3名がしたいという願出がある。また嘉永2年（1849）11月には、「岩鼻坂浅井平吉様角まで仕替え並に塀下石垣仕る」とある。大正5年（1919）に天理教分教会が坂の西側に創立された際、坂の途中に下からの石段が築かれ、石段より先に続いていた坂道を撤去して現在の景観となった。	

番号	名称	記録	内容	写真
6	飴屋の坂	金子絵図 町役所日記	仲町と南台裏丁東端を結ぶ坂。別名「雨夜の坂」とも呼ばれ、雨が降る暗い夜でも白っぽい石畳のため坂道が良く見えたことに由来する。町役所日記には「飴屋坂」の記載はあるが菓子屋、飴屋があったという記録はない。石段造りでくの字に曲がった坂。傾斜も急で、蹴上14㎝、踏面85㎝とされ独特の景観を作っている。	
7	紺屋町の坂	杵築城内外古図	仲町と西町を結ぶ坂。坂周辺は紺屋町といい、町名の通り、紺屋が集まっていたことに由来するという。段造りの記録も事績もなく土砂の坂であった。現在はアスファルト舗装。	
8	一つ屋の坂	いろは版城下町絵図	仲町と上町を結ぶ坂。坂途中に一軒しか家がなかったことに由来する。延宝から元禄期に描かれた「寸法版城下町絵図」や天保期の「いろは版城下町絵図」、さらには文化12年（1815）の「町屋敷絵図」にも一軒の小屋が描かれている。描かれた屋敷の形は町会所の形であり、これが一つ屋の由来と考えられる。	
9	富坂	明治絵図	弓町と西新町を結ぶ坂。宝永6年（1709）の造成と言われており、宝永7年（1710）2月に新町口（富坂下）の元鷹屋敷を町方に払い下げることになり、入札が行われた記録が町役所日記にある。ほかにも正徳元年（1711）12月、下町の大火で焼け出された人々が新町に移されており、富坂沿いにできた新たな町に藩による移住政策が見られる。	
10	久保の坂	いろは版城下町絵図	富坂中腹から一つ屋の坂中腹を結ぶ坂で久保という通称地名が由来する。東西に延びる道は途中でクランク状になり、北に30ｍほどの石段を登る。石段下までが「下久保」といい、登って左（西）に曲り富坂に至るまでを「上久保」という。	
11	天神坂	町役所日記	弓町と南台裏丁西端を結ぶ坂。坂の中腹には飛松天満社の入り口があることに由来する。記録には文久元年（1861）3月に秋田屋金助が天神坂を修復し、残りの石をカブト石の坂の修理に使ったとある。	
12	寺町坂	杵築城内外古図	寺町口番所と南台本丁･裏丁･馬場丁を結ぶ坂。坂の西側には5つの寺が並ぶことに由来する。これは城下町南西の防御を固めるために藩主松平氏により城下町構想の一環として正保２年（1645）から享保18年（1733）の時間をかけて寺院の移転建立がなされた。	
13	射場の坂	いろは版城下町絵図	北祇園と馬場尾口番所を結ぶ坂。北側に弓の練習場であった射場があったことに由来する。番所の外であるため城下町からは外れるが、豊前往還は馬場尾口番所から射場の坂を通って守末･馬場尾･石生谷を経て溝井に至り、豊前に向かう重要な道であった。	

番号	名称	記録	内容	写真
14	清水寺（せいすいじ）の坂	いろは版城下町絵図	清水寺番所と城下町外の北側を結ぶ坂。延宝年間（1673～1681）に梅天無明師（俗銘須田宅之）が開基した清水寺に由来する。現在は廃寺。坂は城下町居住者の若宮八幡社への参詣道であり、宮司・高山川を渡り国東方面へ向かう海岸沿いの道でもあった。	
15	臥温（がおん）の坂	いろは版城下町絵図	上町の佐野家の向かいに、北へ下がる坂があり、その入り口右に「臥温泉」と彫られた石柱が建っている。左側の石柱は倒れており、そこには「浴場道」と「昭和四年（1929）八月」と彫られている。「臥雲亭考」（1959・原山）には「この石柱はかつて吉見氏一族が同浴場を改築の際、中古旧道に石畳と共に設けたので、其の後今の東新道を開鑿してからは自然と通行者も減り、この灯標に関意ある人も稀であろう」と記している。東新道とは北台と上町の境にあった広小路から北に下る坂である。現在は封鎖されている。	
16	カブト石の坂	いろは版城下町絵図	寺町口番所と南台梅ヶ小路・竹ヶ小路の南端を結ぶ坂。坂の登り口に兜に似た石があったことに由来する。	
17	台の茶屋坂	いろは版城下町絵図	据場と南台南端を結ぶ坂。南台南端には「台の茶屋」と呼ばれた藩主の茶屋があった。これは寛文5年（1665）、三川新田干拓工事のため、作業の合図を送るために設けられた場所。	



坂の位置（番号は一覧表に対応）

1)-2　城下町の祭事に関わる建造物

ア）杵築城

杵築城は、応永元年（1394）に木付頼直（きづきよりなお）が築いて以降、木付氏の居城であった。文禄２年（1593）に木付氏が滅びると、数人の武士により引き継がれたが、元和元年（1615）に出された一国一城令によって破棄された。これに伴い、詰の丸、本丸、二之丸、三之丸などにあった天守や櫓、門などが破却された。

正保２年（1645）に松平英親が藩主となると、政治の中心を御殿（現在の杵築中学校）に移した。明治４年（1871）の廃藩置県により、杵築城は役目を終えた。現在の杵築城は、昭和45年（1970）に、模擬天守として建築されたものであり、復元記念碑が残されている。

現在、本市ゆかりの資料等の展示を行い、一般公開している。また、城下町のそこかしこから天守を見ることができ、天神祭りの御神幸ルートの背景に見える姿も親しまれた景観となっている。

杵築城跡は国の史跡に指定されている。

杵築城

杵築城復元記念碑

杵築城竣工直後（昭和46年（1971））

イ）屋敷

●旧大原家住宅（県指定有形文化財（建造物））

旧大原家住宅は、北台の家老丁の通りと酢屋の坂がつくる角地に位置する。北側の家老丁に面して長屋門を設け、東面と西面に土塀を巡らせている。

『杵築市北台南台伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2017）によると、主屋の建築年代は19世紀中期ごろと推定されている。また、同報告書には、武家屋敷としての保存状況がよいこと、草葺屋根の最も高い格式を示す遺構であること、中島のある池を穿（うが）つ庭園が立派であることなどが評価されている。

家老を務めた大原氏の邸宅であった建物で、現在は公開施設となっており、かまどで木を焚いて屋根材をいぶすなど、昔ながらの手法で維持管理している。また、敷地内には屋敷神が祀られており、以前は年に一度、屋敷祭りを行っていた。

旧大原家住宅長屋門

旧大原家住宅主屋

●磯矢邸（市指定有形文化財（建造物））

磯矢邸は、北台の勘定場の坂を上ったところに位置しており、天神祭りの御神幸が近くを通ると、にぎやかな音が聞こえる。

建築年代は祈祷札のある文化13年（1816）で、増築部分は元治元年（1864）の可能性が推察されている（『杵築市北台南台伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2017））。

主屋は、寄棟造、桟瓦葺で、後方に角を出すL字型の平面で、一部が厨子（つし）二階となっている。二階外壁は大壁である。敷地内には茶室も設けられている。

明治元年（1868）の「藩士住居地図」によると、加藤家の屋敷であった。平成８年（1996）に修理し、その後、公開施設となっている。

磯矢邸門及び土塀

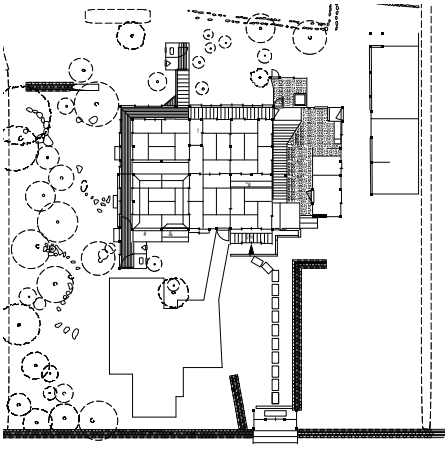
磯矢邸主屋

●旧田嶋（たじま）家住宅

旧田嶋家住宅は南台裏丁の南側にある敷地に建つ。『杵築市北台南台伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2017）によると、土地の来歴は延宝から元禄期（1673～1704）に描かれた「寸法版城下町絵図」まで遡（さかのぼ）ることができ、当時の地割が現在まで残っている。また寛政12年（1800）から享和２年（1802）に描かれた杵築城図（金子絵図）によれば、当地の居住者は田中十郎兵衛という150石取りで大目付などの役職を勤めた藩士であった。その後、初代杵築町長田中恒次を輩出した田中家が住み続け、昭和期に田嶋に所有が移り、現在では市の所有となっている。

敷地内入口には伝建地区内唯一の四脚門が建つ。主屋は屋敷地ほぼ中央に設けられており、門からの距離が離れているのは異例である。間取りは整った六間取とされ、表側を接客、後背部を私的な居室とする標準的な間取りを示す。屋根は現在桟瓦葺であるが、梁の上端に合掌を受けていた痕跡が残っており、当初は草葺であったと考えられる。建築年代は構造等から19世紀前半の建築と推定でき、屋根以外に大きな改造はなく貴重な遺構である。

磯矢邸主屋


旧田嶋家住宅　平面図

旧田嶋家住宅

●佐野家主屋及び病棟

佐野家は、上町に位置し、寛永年間（1624～1644）から代々杵築藩の藩医を勤めた家系の住居と病棟の建物である。

主屋の建築年代については、佐野大雄（寛政9年（1797）～天保6（1835））が記した『達亭記事』によると、天明元年（1781）の項に「今年居宅新築ス。横三間、長サ七間、四方檐、瓦屋、書院立チ風。五月十四日ニ始メ明年ニ終ル。匠正ハ藤田善兵衛、加力人ノ類ハ藩中挙シテ至ル。（省略）」とある。また、平成26年(2014)の主屋保存改修工事において、床框から「児屋入手釿始天明元庚丑潤五月十四日、藤田善兵衛」の墨書や、書院板裏から「天明三癸卯秋八月工師藤田善兵衛造作」の墨書などが発見され、史料内容と整合している。また、隣接する病棟は、棟札から大正15年(1926)に建てられたものと分かり、当時珍しい洋風建築である。

天神祭りの御神幸の背景として、変わらぬ姿を留めている。

佐野家主屋

佐野家主屋座敷

佐野家病棟

● 旭楼

古野に位置する。元は遊郭として建てられたもので、3階建ての客室を持つ建物である。棟札により大正12年（1923）2月に建築されたものであることが分かる。施主は藤原徳三郎とあり、世界で活躍した杵築のテノール歌手藤原義江の養父である。

木造3階建ての建築物が周囲からもよく見え、天神祭りの御神幸の背景となっている。

旭楼

ウ）町家

●とまや店舗兼主屋（登録有形文化財）

とまやは、江戸時代から続く商家で、江戸時代後期から茶業に転じて、現在に至る。

店舗兼主屋は、間口4間半の敷地前面に建つ、2階建て、妻入りである。絵様繰形付の持送りで支持した出桁で軒を支え、大壁造としている。明治29年（1896）建主であった呉服商から買い取った証書

とまや店舗兼主屋

があるほか、随所に角釘が使用されていることから、建築年代は伝聞の通り、明治８年（1875）と推定される。

天神祭りでは、お上り終盤のルート沿いに位置し、人々で賑わう祭の風景を今に伝えている。

●綾部みそ屋（市指定有形文化財）

現在味噌製造が行われているが、昔は谷塩と呼ばれた豪商塩屋長右衛門の屋敷で酢屋であった。

敷地には、南端に２連の主屋、西端に西土蔵をL字におく。北側には西端に蒸窯・圧力釜と煙突を設置し、中央部に東土蔵を配する。東土蔵の南に井戸、東には屋敷神の石祠を設けている。

主屋の建築年代は明らかではないが、登梁、床梁に「谷塩」の刻銘があることから、酢屋創業という明和期（18世紀後半）まで遡る可能性がある。また東主屋の内部の一部を洋風にしており、明治33年（1900）に創業した綾部家の先々代の施主によるものと考えられる。一方、東土蔵は祈祷札により明治７年（1874）、西土蔵は棟札により明治18年（1885）の建設が明らかである。

酢屋の坂と塩屋の坂の交差点の角地に位置し、天神祭りでは、最高潮に達した御神幸の背景として、印象的な空間を形づくっている。

綾部みそ屋

●御船手長屋

御船手長屋は、城下町の東部に位置する建物で、藩の用船を管理する藩士たちの住居だったものの一部である。『町役所日記』の嘉永５年（1852）の記述によれば、「千石蔵前の木部屋より出火。城ノ鼻まで全焼」とあり、この大火後の建築であると推定される。『寸法版杵築城下町絵図』（延宝～元禄）に描かれた区割りからは、かつては西から６軒長屋１棟、５軒長屋が３棟の計４棟が海沿いに並んでいたことがわかる。昭和45年（1970）の航空写真では、絵図と同じ長屋の配置が確認できる。現在は、長屋の一部が改築され、６軒長屋の左右２軒と５軒長屋の西側２棟の一部が残っており、船方の建築物として極めて珍しい。天神祭りではお下りの御神幸の背景となっている。

御船手長屋（昭和45年（1970））

御船手長屋（現状）

御船手長屋

エ）社寺

●八坂社

大字杵築字札ノ辻にある八坂社である。「町役所日記」（県指定有形文化財）によれば、天保11年（1840）に城下町に疫病や火災が流行したことから町人の願いによって城下町の西側に位置する馬場尾口番所の外側に創建された神社で、創建当時は石造の本殿であったことが、「いろは版杵築城下町絵図」からもわかる。八坂社石造旧本殿（県指定有形文化財）は現在も同じ場所に位置しているが境内の様相は異なる。改築記念碑によれば、大正13年（1880）10月から昭和３年（1928）7月にかけての大工事により、境内の拡張に伴う玉垣の増築、本殿、拝殿、旧本殿を利用した乃木神社の造営などが行われ、現在に至る。

現在は、東側の道路から一段上がった場所に八坂社の鳥居や石灯籠が建ち、西に参道が延び、突き当たりに木造の本殿と拝殿が東面して建つ。本殿の南側には八坂社石造旧本殿のほかに乃木神社の鳥居と改修記念碑が建っている。境内入口にある八坂社の鳥居は大正９年（1920）６月、石灯籠は明治12年（1879）に建立されたもので改修以前から境内にあった。

八坂社の本殿は、一間社流造、屋根は銅板の一文字葺、棟には三本の堅魚木（かつおぎ）を設けている。屋根には反りがなく直線的で、落とし込み板壁や脇障子には一切の装飾がなく質素な造りである。拝殿は、桁行３間、梁間２間の平入桟瓦葺で前面に１間の向拝付で弊殿と一体となった凸字型の棟になっている。

天神祭りでは、神輿の休憩所として利用されている。

八坂社石造旧本殿

八坂社拝殿

八坂社鳥居

●飛松天満社（とびまつてんまんしゃ）

大字南杵築字馬場丁に位置する飛松天満社で、谷川筋から南台に上る一番西側に位置する天神坂の途中にある。拝殿右横にある杵城菅廟碑（きじょうかんびょうひ）（市指定有形文化財）※2の碑文によれば、本社は当初、据場町の石崖に祀られていたものを寛文5年（1665）に藩主松平英親の命により神官が配置され、延宝８年（1680）に現在の場所に遷座したとある。また『町役所日記』（県指定有形文化財）には、享保17年（1732）、寛政14年（1792）、文化13年（1816）など遷座後も度々改修されている記録がある。これらの修復には城下町の商人が講組を作って資金を工面したと物集高世（もずめたかよ）の『天満宮造営講由良

※2　三浦梅園（1723～1789）が菅原道真の徳業をたたえ撰文したもので、書は中国清の時代の壬禄（じんろく）という書家によるものである。天明３年（1783）の造立

記』(1864) に記されている。そのほか、境内には元禄５年 (1692) から昭和２年 (1927) までの間で計24基の石灯籠が寄進されており、町人の氏神として信仰を集めている。

本殿及び拝殿は天神坂に面して設けられた鳥居を経て西側に延びる参道の突き当たりに東面して建つ。現存する本殿は、一間社流造、銅板葺で正面に千鳥破風と軒唐破風が付く。また妻飾や大瓶束や脇障子などに波模様の彫刻がある。

本殿の前には幣殿に続き拝殿が設けられている。拝殿は、桁行３間、梁間２間の入母屋造平入桟瓦葺で前面に一間の向拝が付く。

飛松天満社

●東泉寺（とうせんじ）

大字杵築字祇園に位置する東泉寺である。延暦寺末天台宗の寺院である東泉寺は、小城山宝命寺 (国東市武蔵町小城499) の六坊の一つであった東泉坊を天明年間 (1781～1789) に末広伊右衛門の発起により、現在地に移転し、青照山東泉寺と称して開基したという。また、寛政2年 (1790) ころに町の豪商塩屋伊惣助が建立したという説もある。

本堂正面には、末広 (塩屋) 忠右衛門が寛政3年 (1791) に寄進した石灯籠があり、また「町役所日記」(県指定有形文化財) の享和3年 (1803) 4月12日の内容に塩屋長三郎と塩屋忠右衛門の両名は元々宝命寺の檀家であったが願いが聞き入れられ、新たに東泉寺の檀家となったことが記されており、塩屋と縁が深い寺である。

本堂は桁行５間、梁間４間に１間の向拝付で、屋根は桟瓦葺で箕甲が付く。陸棟、降り棟、隅棟の鬼瓦には、杵築藩主松平家の家紋である五葉雪笹が付される。外壁は漆喰壁で、正面左右には火灯窓がある。

本堂前にある墓地内には、豊後の偉人三浦梅園（みうらばいえん）の息子で藩校でも教鞭をとった三浦黄鶴（こうかく）の墓や法政大学の創立者のひとりである杵築藩士金丸鐵（かなまるまがね）を輩出した金丸家の墓などがあり、文政期から現代までの墓碑がある。

天神祭りの御神幸ルートでは、ここが西端となり東泉寺前で折り返し城下町の中心部を通って東にある御旅所（おたびしょ）に向かう。

東泉寺

●杵築神社

大字杵築字錦城（きんじょう）にある杵築神社である。明治25年 (1892) 3代藩主松平重休（しげやす）の遺徳を仰ぎ、旧領民が官に願い出てかつて城内であった藩主御殿 (国指定の史跡杵築城の一部) の西側に創建したもので、後に初代英親も合祀された。昭和45年 (1970) から天神祭りの御旅所となっている。城下町の北東にあり、南西にある出発点の飛松天満社とは対

杵築神社社殿

極に位置する。境内には、宮地嶽神社（明治29年（1896）建立）や錦城区と広小路区の天神祭り山車倉庫、明治26年（1983）と大正15年（1926）に寄進された石灯籠がある。

本殿及び拝殿は、道路に面して設けられた石柱（明治32年（1899））を経て北側に延びる突き当たりに南面して建つ。本殿は、一間社流造で、屋根は銅板の段葺である。虹梁、海老虹梁、桁隠などには波または雲の彫りの深い彫刻、蟇股には杵築藩主松平家の家紋である五葉雪笹が施され、正面の観音扉には檜の一枚板を使用するなど随所に高価な部材と丁寧な意匠がみられる。

拝殿は桁行３間、梁間２間、入母屋造平入桟瓦葺の建物で、前面に入母屋造の向拝が付く。陸棟に波・雲と五葉雪笹紋が施され、鬼瓦にも五葉雪笹紋、軒丸瓦には七葉紋を施すなどいずれも藩主松平家の家紋を使用している。このほかにも、軒裏四方と向拝に至るまで二重軒にするなど本殿同様豪華な造りとなっている。拝殿内には、昭和48年（1973）に改修を行ったことがわかる「杵築神社造営改修寄付者芳名」の額がある。

宮地嶽神社

杵築神社にある山車倉庫

天神祭り御旅所石祠

杵築神社石灯籠

2）城下町の営みに関わる活動

2)-1　屋敷祭り

ア）概要

屋敷神信仰は豊前、豊後に見られる。屋敷荒神ともいい※3、敷地内の鬼門方向に石の祠を祀る※4。屋敷神信仰は、北台、南台の武家屋敷とその周辺の町家も含め、城下町に広く受け継がれている。伝建地区内の旧大原家住宅や旧田嶋家住宅などにも屋敷神を祀る祠が残っている。

祠を祀る家では、平時は水、塩、榊を供えて祀っているが、年始に1度、商家など縁起を担ぐ所では年に3度、宗教者を招いてお祓いをしてもらう。これを屋敷祭りといい、祠を所持していない家でもお祓いだけ行う場合も多い。その場合は、数軒一緒にお祓いしてもらう。祭祀を執り行う宗派は様々で、現在では、飛松天満社の宮司、金剛宝寺の僧、黒住教の教主の場合が多い。そのため、年始の時期は、家々を回る神主や僧といった宗教者の姿や、祝詞の声が城下町の様々なところから聞こえ、道から見える祠には真新しい御幣が供えられるなど屋敷祭りの伝統的な風習を感じさせる。

屋敷神を祀る祠

御幣をつくる様子

御幣をつくる様子

御幣をつくる様子

仏壇に参る様子

神棚

祠に向かいお祓いをする様子

※3　東北から北関東では「内神・氏神」、東海から中部までは「地神」、中国から九州は「荒神」という傾向があるようだが、どれも「屋敷神」の信仰と機能は同じである。本計画では、本地域でよく用いられる「屋敷神」を用いることとする。

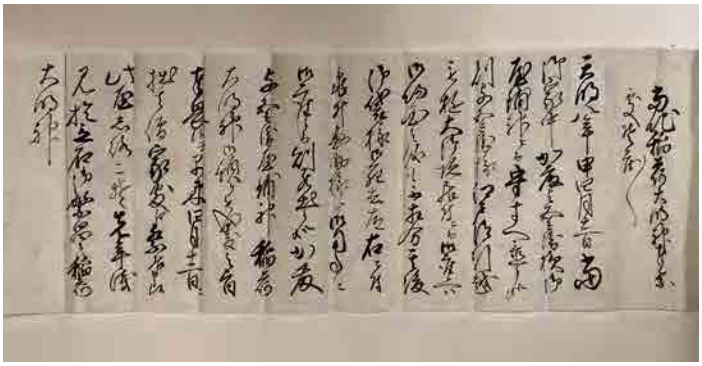
※4　「屋敷祭り」は固有名詞として「祭り」の字を用い、動詞としては一般的に「祀る」の字を用いることとする。

イ）歴史

天保12年（1841）４月に記された『覚』（加藤家文書）によれば、天明８年（1788）に杵築藩士加藤与五兵衛が江戸に引っ越すことになったため屋敷神である稲荷を亀井勘助に預け、その際に光明院が勧請鎮を行った記録があることから、18世紀後半には屋敷神信仰が根付いていたことが分かる。

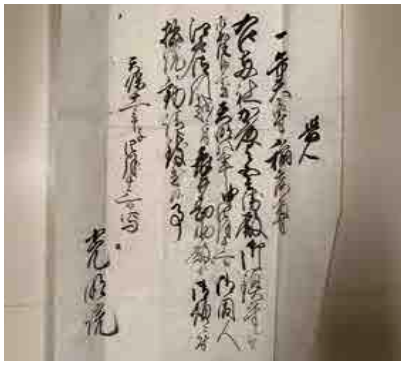
また『杵築市伝統的建造物群保存対策調査報告書』（1981）によれば、近世後半になると、稲荷行者の関与により、稲荷を祭神とする家が多くなったと考えられている。廃藩後、屋敷祭りを行う家は所有者の交代などにより、減少しているが、現在でも、あちらこちらで屋敷祭りの風習を見ることができる。

光明院に移された屋敷神



当地稲荷大明神祀奉所
そもそも
天明八年申四月十二日当
御家中加藤与五兵衛様御
屋敷神に而守すへ置之処
則与五兵衛様江戸御引越
被遊大御隠居付に而御座候ハ
御帰国之儀も不相分其後
御袋様御死去故右に付
亀井勘助様より御用事に
御座候而罷出候処加藤
与五兵衛屋敷神稲荷
大明神御預ケ被成度之旨
奉畏候テ早速四月十二日に
拙者僧家敷江祭居申候
此屋しろこそ先年浅
見於立石御繁昌之稲荷
大明神

加藤家文書（屋敷神）



覚
一　弁天尊　稲荷尊
右両社加藤与五兵衛殿御鎮守に而
御座候処、天明八年申四月十二日御同人
江戸御引越に付、亀井勘助殿より御預に付
拙院に勧請鎮置候事
天保十二年子四月十三日写
光明院

「覚」加藤家文書

ウ）屋敷神の分布

屋敷神は城下に広く分布している。

武家屋敷では、屋敷地の南東隅と北東隅に屋敷神を置くことが多い一方、町家では、方位の規則性はみられない。祠は、石造で、高さ40㎝程度の小ぶりのものが多いが、町家で３件、武家屋敷で２件において、木造で、最大間口・奥行ともに70㎝、高さ２ｍという大型の祠も存在する。

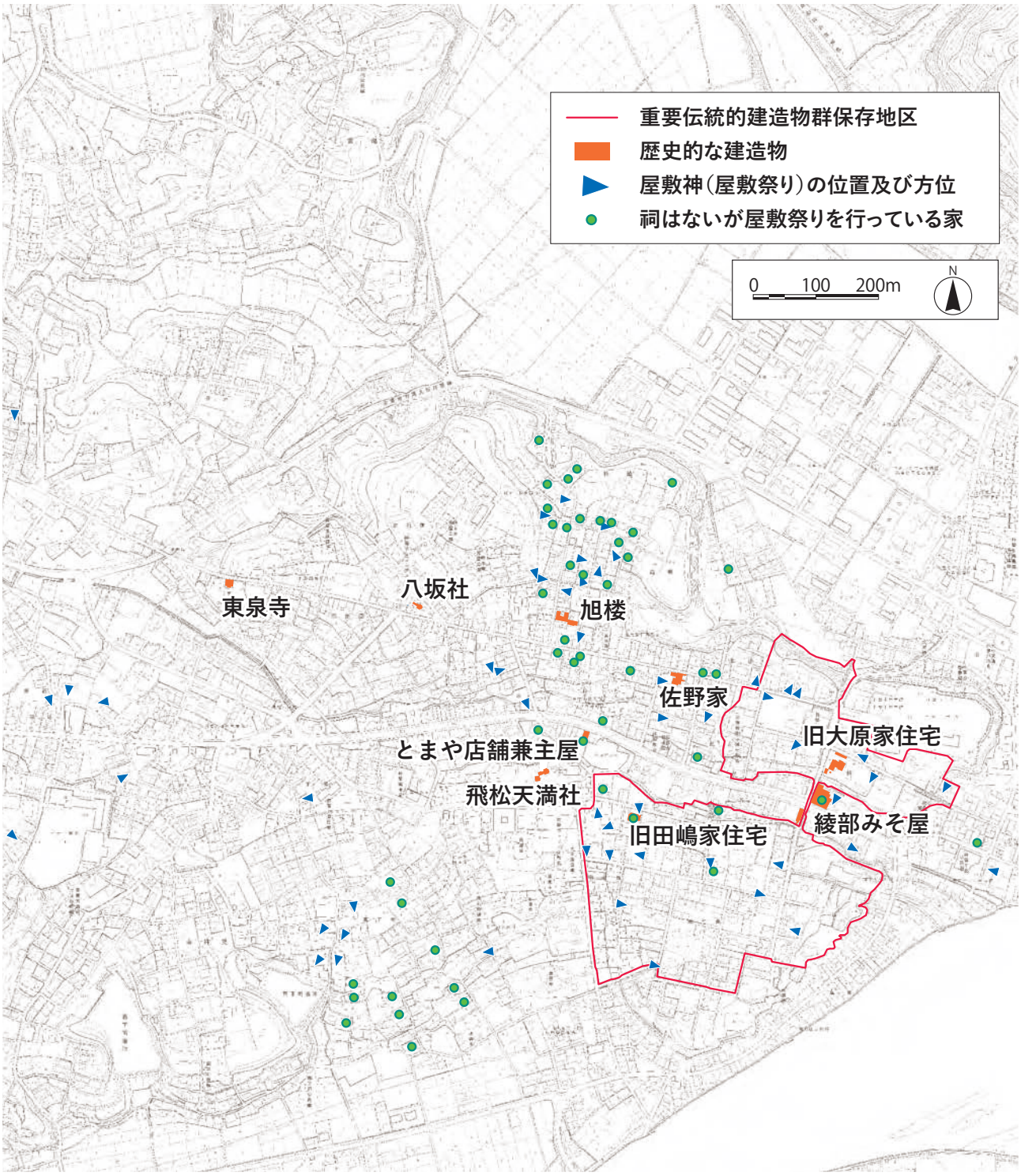


図　屋敷神の分布

2)-2　天神祭り

ア）概要

飛松天満社の祭典は、春、夏、秋と3回の例祭があるが、そのなかでも夏が大祭であり、近郷の人々に「天神祭り」として親しまれてきた。天神祭りは毎年7月25日に杵築城下町の各町と近郷住民によって盛大に行われる。当初6組の町から始まり、多いときには20組を超える町となったが、近年では魚町・弓町・南祇園（みなみぎおん）・据場・仲町・本町・広小路・西新町・錦城・谷町・富新（とみしん）※5の11組の町がお供廻りとして練り物を出して参加している。

イ）歴史

杵築郷土史の先駆者である土居寛申（どいひろみ）による杵城菅廟碑（市指定有形文化財）の略解によれば「我杵築では元和のころ（1615～1633）、諸富某によりて据場町の岩崖の下に（神祠が）祭られたが、寛文5年（1665）ときの藩侯松平英親は、社地の租税を免し、神官を置き頗る崇敬の礼を尽くした。然るに社地が狭いので延宝8年（1676）現在の地に遷座し、四季の祭礼盛んに行われ、天災地変悉く廟に祈った。」とあり、すでに祭礼が行われていたことがうかがえる。『町役所日記』の天神祭りに関する初見は、宝永3年（1706）2月26日で、「天神町行の儀、願之通被仰付候、御旅所の儀は近松寺（きんしょうじ）御蔵の明地分御借被成候由、物毎軽く仕候様に被仰付、寺社方並町奉行所へも善右衛門参り承候」とあり、御旅所は現在の寺町の南にあたる近昌（松）寺で、現在の巡行ルートとは違うがすでに御神幸が行われていたことが記されている。この年以降、『町役所日記』には天神祭りに関する記録が散見される。特に宝永5年（1707）は「天神御幸場所の儀近昌（松）寺にて御座候へば当年は町方より山なども拵え山し申す様申候、然る処に魚町筋道路悪敷に御座候間逗（留）り兼可申すやと町奉行へ御話申上候へば六月十八日の御寄会にて御沙汰被成候へばとかく殿様御帰城被遊候節御伺被成候間二十一日か二十三日の御寄会に御沙汰被成候様にとの事に御座候」、返答として「天神祭礼御演出場所鳩の鼻に被仰付候事」とあり、町から練り物を出す現在の天神祭りの形態が定まりつつあり、御旅所が鳩の鼻、現在の城鼻という川口番所のあった場所に移ったことがわかる。

宝永5年（1707）に城鼻に御神幸を行って以来、毎年この日を祭日に定め、160年間数例の例外を除いて旧暦の6月25日に祭礼日が定着した。明治5年（1872）に太陽暦が導入されると新暦と旧暦で混乱をきたし、新暦派と旧暦派が対立し、祭りが2回行われるという珍事がおきた。そのため、明治20年（1887）より明治25年（1892）までは旧暦に復し、6月25日とした。しかし、大正時代になると新暦も一般化し、新暦の7月25日と決定した。この間、藩の援助もあり、祭礼の盛況を増すと、1日だけでは物足りなくなり、祭典日を2日、ときには3日間することもあったが、結局は経費がかさみ長続きはしなかった。昭和40年（1907）代になると河川護岸工事によって、御旅所で

飛松天満社元宮

※5　町名は「富坂（町）」、坂名は「富坂」と表記。天神祭りの時に富坂（町）と新町が合同で参加する組名は「冨新」とする。

あった城鼻の地も狭くなり、転々と場所を変えた後、昭和45年（1970）に現在の杵築神社境内に定着した。

初期からお供廻りに参加した町は、新町、仲町（当時は中町と記す）、谷町、下町、魚町、西町の６組であった。その後、城下町の拡充とともに、新町から富坂町、西町から西新町と北新町が独立し、下町は本町と六軒町に分かれた。寛延期になると練り物を持っている組と共同参加する形で上町、紺屋町、札の辻も参加し、維新後新たに出来た広小路町、南北祇園町、据場町、弓町、錦城、錦町などの氏子が参加し20組を超える町が天神祭りに参加した。

ウ）当日の流れ

祭りに先駆けて前日の24日18時から富坂町と新町合同の冨新組と谷町の各町から段尻（だんじり）が出る。段尻は両町とも同一構造で、６輪の２階構造の屋台山車であり、１階に囃子方、２階の舞台に踊り手が乗り、日本舞踊などを披露することができる構造となっている。

祭り前夜に谷筋のメインストリートで行われる段尻舞台からの日本舞踊披露を「宵宮（よいみや）」といい、町の住人はこの囃子と舞で祭りの始まりを意識する。

21時ころには、2台の段尻が富坂の中腹、飛松天満社と同じ高さで停めて、舞台を神社の方向に向け、神様に向かって舞の奉納を行う。これを「神納」という。

祭りの当日は９時の祭典までに各町の練り物と神輿（みこし）の担ぎ手が集合する。神事の終了後、祭主は御神体を神輿に移し、お下りの御神幸となる。御神幸は毛槍（けやり）（魚町）、御鉄砲、随臣、獅子駒（ししこま）（弓町）、錦旗（にしきはた）（南祇園）、大榊、太鼓、御供櫃、大賽銭箱、小賽銭箱、天狗、御神輿（杵築天満社本御神輿協賛組）、元宮御神輿（もとみやおみこし）（据場）、御所車（ごしょぐるま）（仲町）、御所車（本町）、花山（はなやま）（広小路）、山鉾（やまほこ）（西新町）、飾山（錦城）の順で行われる。

毛槍（魚町）

獅子駒（弓町）

錦旗・荒神（南祇園）

神輿

元宮神輿（据場）

御所車（仲町）

御所車（本町）

花山（広小路）

山鉾（西新町）

飾山（錦城）

段尻（冨新・谷町）

喧嘩

特殊な動きをするのが、谷町と冨新の段尻で、いずれも御神幸とは異なるルートで町をまわる。両町とも宝永5年（1708）から段尻を出している古参であり、藩主の前での奉納だけでなく、町役人休憩所や町奉行宅前、出資をしてくれた豪商宅の前で舞踊等を披露してきた。そのため段尻はほかの町のお供廻りとは別格に扱われ、御神幸の順路通りではなく、つかづ離れず町中を廻ることを許されてきた。そのため現在でも御神幸の邪魔にならないように列の前や後ろをうまく通り、町中に設けてある演芸所約100ヶ所を演舞してまわる。

また神前である据場にある元宮や杵築神社の御旅所では前日同様、神に向けての「神納」を奉納する。

お下りは、飛松天満社を出発後、城下町西の新道・弓町から富坂を登り、北西に位置する八坂社のある札ノ辻、東泉寺のある南祇園や北祇園、そこから旭楼がある西町や西新町、北新町、佐野家のある上町の城下町北側を通り、紺屋町の坂を下って、仲町・谷町・本町の町の中心部を進み、南の魚町・据場に向かい、飛松天満社元宮で神事行い、休憩をとる。その後、南東の六軒町を通り、御船手長屋や川口番所（かわぐちばんしょ）があった城鼻（しろはな）で杵築城を背景に折り返し、東側の広小路・錦城を一周して、旧杵築市立図書館兼民俗資料館の傍らを通って、錦城区内にある御旅所（杵築神社）に17時ころ到着する。

お上りは20時に御旅所である杵築神社を出発し、広小路を過ぎて、綾部みそ屋ととまや店舗兼主屋などが軒を連ねる谷町、仲町、新町の谷川筋を通って23時ころに飛松天満社に帰る。お上りの道中、酢屋の坂と塩屋の坂の交差点などでは、山車同士がぶつかり合う「喧嘩」が行われ、坂などに集まった見物客を盛り上げている。このように天神祭りは、伝建地区を取り巻くように御神幸が行われるため、賑やかな音が旧大原家住宅や磯矢邸などのある北台や田嶋家などのある南台の武家町のなかにも響きわたり、城下町は活気ある一体感に包まれる。

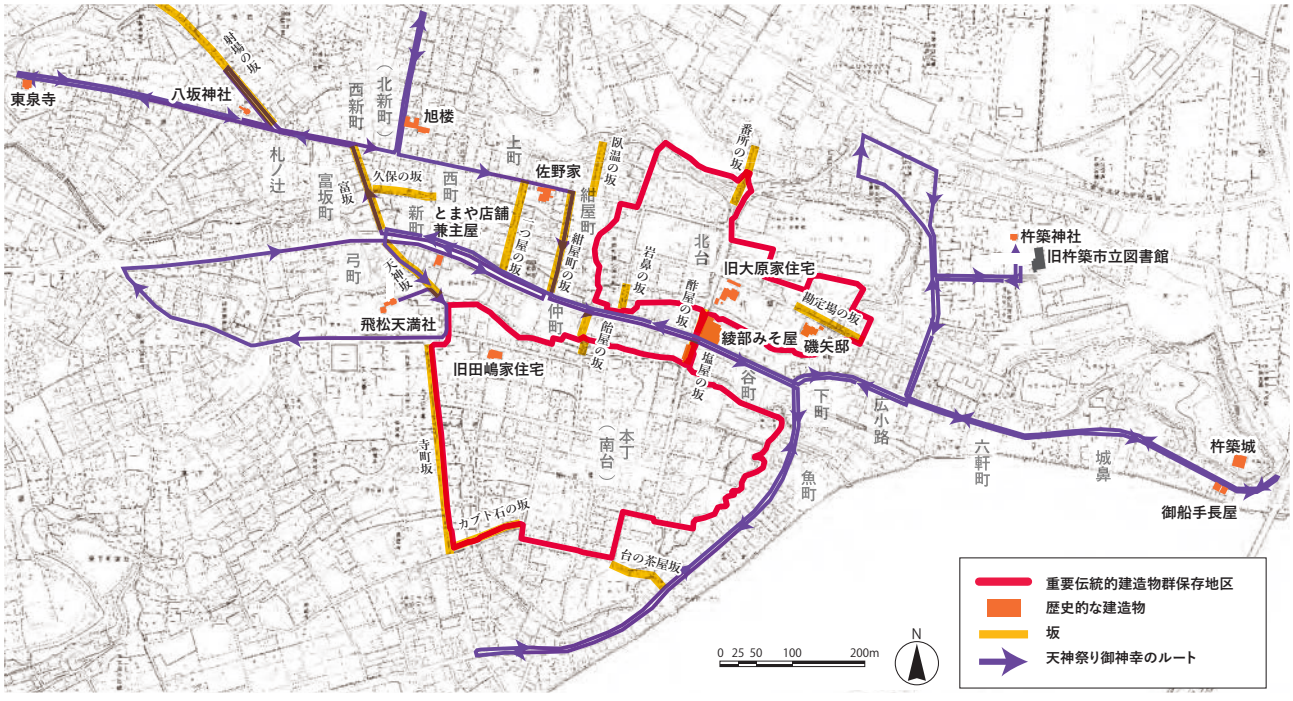


図　天神祭り御神幸のルート

エ）運営組織

祭りの運営は各地区を代表する８人の宮総代、お供周りごとに町から選出される総裁と宰領が中心となる。宮総代は飛松天満社の例祭すべての運営に携わり、天神祭りでは祭日や開催時間など祭り全体の決定権を持つ。総裁は、お供回りごとに１人が選出され、祭り当日の運行順路や時間を取り仕切る。これを補佐するのが宰領であり、各町から4、5名が選出される。谷町では、宰領のことを「肩助」ともいい、段尻の運行方向を指示する重要な役割を果たす。これらの祭礼組織は、藩政時代の形態を引き継いでおり、町奉行が祭奉行となり、町の代表である宿老が宮総裁と総裁を務め、宿老の補佐役である与頭（くみがしら）が宰領となった。

近年、人口減少により練り物を運行する人数が集まらず御神幸に参加できていない町もあるものの、当日は役付や住人だけでなく、市外に出た縁者が集まり、総勢70人を超える組もある。天神祭りに参加してきた町の人々にとっては、盆、正月ではなく、天神祭りのために帰省するのが当たり前という意識があるほど、地域に根付いたものとなっている。

2)-3　祇園祭り

ア）概要

八坂社の祭典には、年越し、春季、夏季の３回がある。そのなかでも7月15日に近い日曜日に行われる夏季の祭典は祇園祭りといい、昭和30年代までは天神祭りと並ぶ城下町の夏の行事であった。

祭りの中心となったのは、城下町の西の玄関口で番所の中でもっとも大きい馬場尾口周辺の札ノ辻、煙硝倉、北祇園、南祇園の町人であった。昭和40年（1965）ころまでは札ノ辻は全て商店であり、南北祇園は旅館が軒を連ねていた。近年、商店や旅館は姿を消しつつあるが、祭りの運営は藩政時代から変わらず受け継がれている。

祇園祭りの子供毛槍

祇園祭りの御神幸

祇園祭りの神事

イ）歴史

『町役所日記』には、天保11年（1840）４月26日の記述に「乍恐奉願上口上書」として次の様にある。

「近年疫病が流行して止まず、猶又折々火災等も有り、乍恐御上様を始め奉り、御守護の為に、祇園宮並秋葉宮を、馬場尾口外隅の石垣空き地の処に、御遷座願い奉り度く、数年心願の処、幸に中平兵太夫殿の屋敷内に祭った両社があり、兵太夫殿へは内談仕り承知に付、御免くださるならば、右の場所へ、東向きに石祠取立て御遷座仕り度く御願申上げ奉る。以

上。」とある。この願いは同5月2日に許可され、翌年の6月14日に落成した。その夜祭礼が行われた記述があるが、今のような御神幸はなかったようである。明治25年（1892）ころから神明社まで御神幸がなされるようになった。

昭和26年（1951）、27年（1952）ころの祇園祭り子供毛槍

ウ）当日の流れ

祇園祭りの祭日は元々7月14日が「宵宮」、翌15日が「例祭（祈年祭）」となっていたが、最近は7月15日に近い土曜日と日曜日を祭日としている。「宵宮」は18時から神事が始まり、その後はカラオケ大会や日本舞踊の披露、富くじなど参拝した氏子が娯楽に興じる。翌日の例祭は14時からはじまり、最初に子供毛槍の巡行を先導として御神幸が行われる。御神幸のルートは神社を出て東泉寺の前を通り過ぎ祇園橋で折り返して南祇園地区を囲むように進む。その後富坂を登り、上町筋を東に向い常光寺の前で折り返し、八坂社に戻る。神輿を先導する巡行の順番は、本来は猿田彦（1）、毛槍（5）、鉄砲（5）、鎧武者（1）、獅子頭（4）、神器（2）、楽人（9）、荒神（5）、神燈（2）、神輿（20）、神職（2）、総代（6）、諸役（9）、飾山車（曳子約20）など立派な行列であり、巡行ルートも天神祭りと同じだった。この形を維持できたのは昭和30年代後半までで、その後徐々に規模を縮小して現在では、猿田彦（1）、毛槍（10）、神輿は軽トラックで運ぶ形になってはいるがこれまで一度も途切れることなく続いている。

昭和32年（1957）ころの祇園祭りの様子

祇園祭り御神幸の範囲

(3)まとめ

杵築城の城下町は、藩政期の地割をよく維持しているとともに、武家屋敷、町家、寺社が一体となって、往時の面影を色濃く伝えている。

城下町の人々は、18世紀後半には各家で屋敷神を祀り、年に一度の屋敷祭りを行うことで、家々を大切に守り伝えてきた。今でも屋敷祭りが行われる1月ころに城下町を歩くと、祝詞を上げる僧や神主の声が聞こえ、屋敷神を祀る祠には真新しい御幣が供えられている様は、城下町の新年の始まりとともに江戸時代から続く信仰を受け継いできた人々の姿を見ることがきる。

また、夏には、宝永5年（1707）から続く天神祭りや天保11年（1840）から続く祇園祭りが行われ、御神幸の音で城下町は活気に包まれる。城下町の地割を維持した町並みは、御神幸の舞台として、町ごとに異なる個性的な景色をみせる。このように、伝統を受け継ぐ町並みと、そこでの営みは、切り離すことができず、一体として守り継ぐべき本市を代表する歴史的風致を形成している。

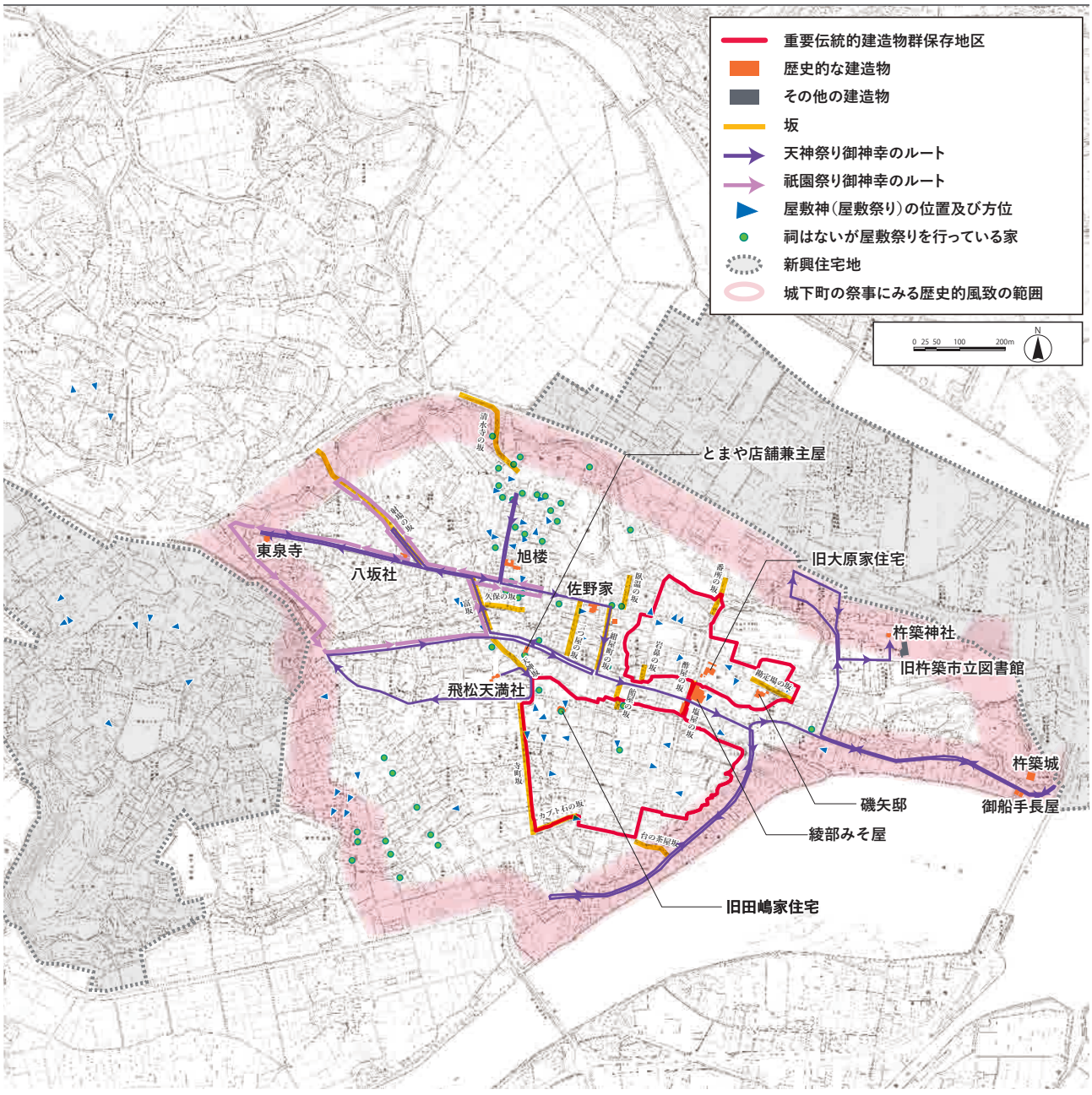


図　城下町の祭事にみる歴史的風致の範囲

コラム ‖　旧野上家（周防屋）

旧野上家は、魚町の八坂川川岸近くに位置しており、天神祭りの御神幸の巡行ルート沿いにある。

旧所有者、野上春吉は明治23年（1890）に旧野上邸の敷地を購入し、倉庫を立てて卸売市場を経営した。大正2年（1913）には居宅を当地に移し、さらに昭和4年（1929）11月27日には、2階建て主屋、平屋建て旅館2棟、2階建て旅館2棟などを登記した記録があることから旅館経営に転向したことがわかる。旅館の名称は江戸時代に譲り受けた屋号「周防屋」を用いた。また旅館の敷地内には、九州を中心に活躍した庭師　東森堂（1870～1950）によって築庭された庭園がある。旅館をはじめとした建造物は老朽化が著しく令和元年（2019）にすべて解体されたが、庭園は今も当時のまま残っている。

旅館「周防屋」は、世界で活躍した杵築出身のテノール歌手藤原義江が凱旋した時の宿泊場所となるなど杵築を代表する旅館であっただけでなく、杵築出身者が庭園で記念写真を撮影する思い出の場所となっていた。現在は、地域住民の憩いの場としての集会施設を建設中である。

旧野上家

現在の庭園

コラム ‖　旧杵築市立図書館兼民俗資料館

旧杵築市立図書館兼民俗資料館は、杵築神社の隣に位置している。

本市出身で大分県を代表する哲学者三浦梅園に関わる史料を集め公開することを目的として明治43年(1910)に梅園文庫が設立された。この梅園文庫に収集された古文書とその機能を引き継ぎ、さらに郷土の人々の暮らしを伝える民俗資料を公開・保存する施設として、市立図書館兼民俗資料館を昭和53年（1978）2月に建設した。平成29年（2017）に一般公開を休止し、現在は民具等の収蔵庫として使用している。

天神祭りでは、すぐそばが御神幸の通り道となっている。

旧杵築市立図書館兼民俗資料館